に華やかに過て、浮薄になる傾があり、又忠實に寫せば、繪が重くなつて櫻の清楚な感じが出ず、ざつと描いては、奥行も圓味も出來ず、淺薄になる。何れにしても寫生に困難なものである。獨り桃の花は、枝もうるさくなく、花も飛び〳〵でなく、色は稍俗ではあるが何處ともなく無邪氣な處があつて、近くとも遠くとも寫生するにさまでの苦しみはない。砂地へ三脚を据えて寫生を始めたら、何處よりともなく子供達が澤山集まつて來た、そして『お叔父さん錢をお呉れと』いふ、『あつちで畫をかいてゐる人は鬚の生えた立派な人だから、あの人からお貰い』と追やれば忽ち返つて來て、『あつちの人は宿屋へ財布を忘れて來たつていふから、お叔父さんに貰ふんだ』といふて傍を離れない。うるさいから捨て置たら、終には惡口いふて去つて仕舞つた。

K、N氏は用事があるといふて、晝から東京へ歸られた。自分は夫から猶川を溯つて、一二枚のスケッチを作り、宿へ歸つてからはT、i氏と五つ並べをして此夜を過した。

十五日、曇方雨。今にも降り出しそうな天氣の模樣に、空を仰いて出掛やうか止めやうかと、三人で相談をしてゐると、女中は雖當の竹皮包を持つて來て、大丈夫てすと連りに勸めるので吾々はとう〳〵追出された。川下て一枚寫生をしたが、そのうち雨が降り出して來たので、急いて宿へ歸つた。今朝大丈夫といふた女中は、よく横目を遣ふ女であるから、今日は横目天氣であらうと皆々笑ひ興じた。

十六日、晴。空は名殘なく晴れた、獨りて松伏の方面へ出かけた。途中の桃林は今が盛りて、昨日の雨にも寥れず美事である。大利根川の渡しを越して大川戸に出て、そこて一枚寫生をした。少し風は立つたが、春は今酣て、實に長閑な景色である。別路をとつて向畑といふ處て雲を寫した。川の岸に大きな柳がある、秋の柳は是迄幾度か寫して經驗があるが、春は初めて、思ひのほか六づかしいものであつた。大澤近くへ歸つてから更に一枚の寫生をした。多作は望みではないが、四方があまり景色に富んでゐるので、殘して歸るのも惜しく、つひ慾張ることになるのである。

十七日、曇。畫囊を肩に出ては見たが、空の樣子は段々わるく、紙を展へる勇氣もなくなり、何だか急に歸京したくなつて、途中から宿へ引返し、勘定もそこ〳〵停車場へかけつけた。かくて程なく田畑へ着いたが、都の春は早や盛りをや過ぎし、櫻の梢色あせて、雪の如く地に敷く花を踏みつゝ、自分は家路へ急いたのであつた。

正　誤

前號美術學校規則中算術史とあるは美術史の誤り

＊　＊　＊　＊　＊